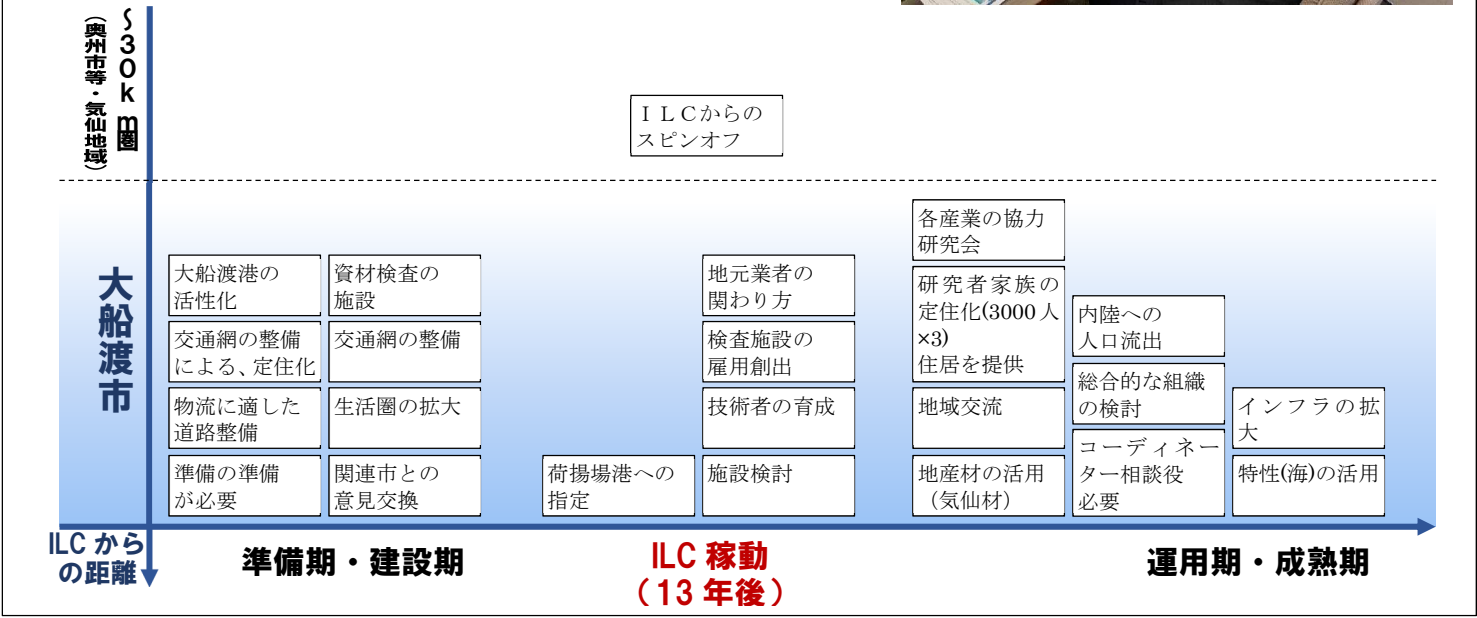


# 第2回委員会における検討結果

第2回委員会ではワークショップ形式で4グループ（産業分野、観光・交流分野、生活・居住・滞在分野、医療・教育・社会分野）に分かれて討議を行いました。  
 委員会資料（ILCからの距離別・時期別に想定される効果を例示した資料）を参照しながら、ILC誘致・実現により「気仙地区で想定されること」及びそれらを実現するために必要なことについて討議しました。  
 各分野共通の課題・施策案として「受け入れ・イノベーション・よりよい暮らしづくりに向けた連携や組織づくり」が重要なものとして挙げられています。  
 以下に各グループ別の討議結果を整理しました。

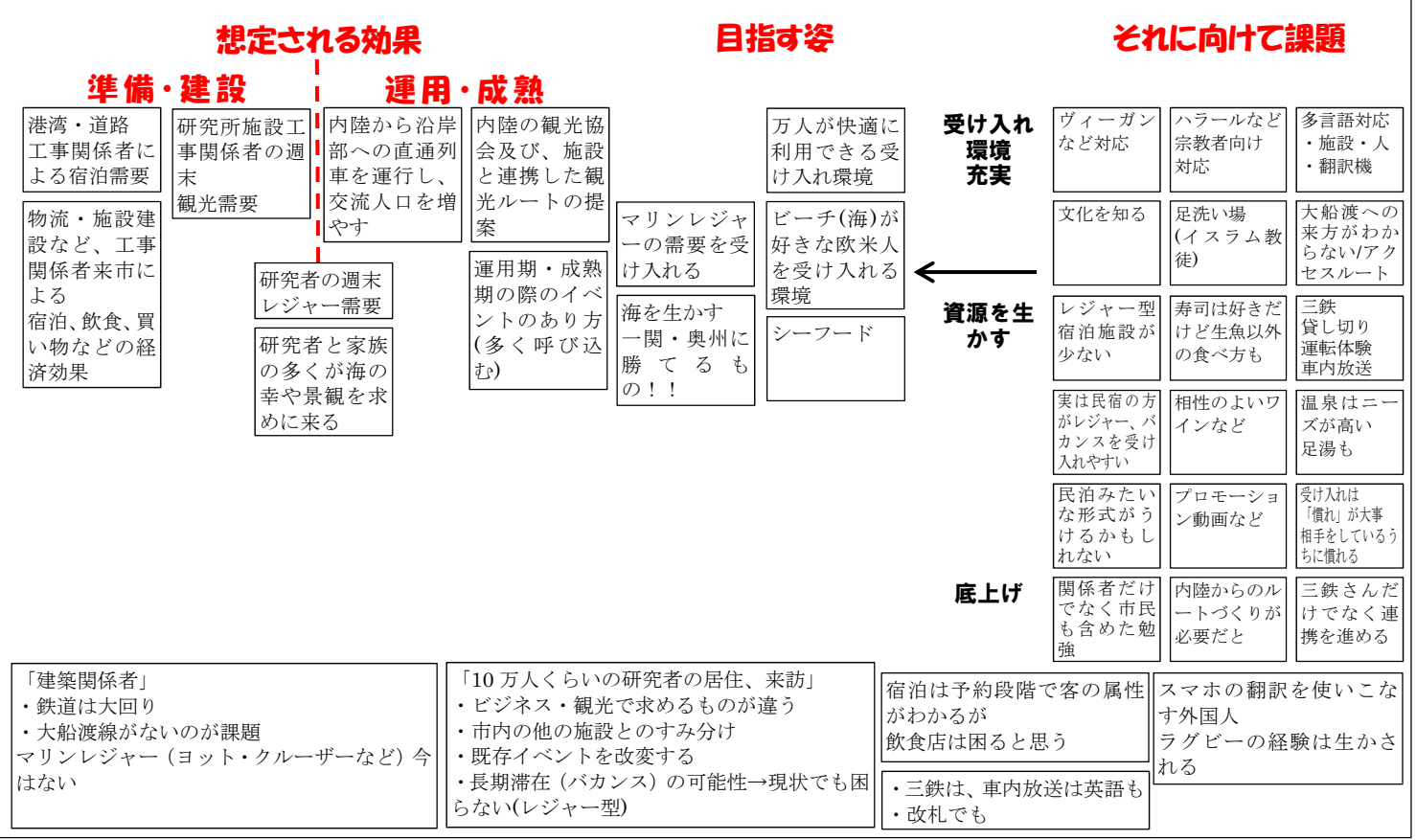
## 産業分野

- 準備期には4年の間に大船渡港そのものの物流拠点の建設をしないとイケない。候補地としては永浜地区が候補地となっている。永浜から物を運ぶとなると道路も重要になる。建設期が始まってから道路整備するのは遅い。コンテナを運ぶための整備も1、2年では対応できない。各峠を越えるための整備をしていくにはいかに早く道路整備を訴えかけることができるかが準備のポイントになるのではないか。
- 永浜地区に（研究設備部品を）仮置するとなると検査場の併設も必要になる。
- 道路が改善されると生活圏も広がる。内陸への道路が良くなると、生活圏も拡大して、こちらからあちらへ、あちらからこちらへの移動も容易になる。
- 準備期として必要なこととして、一関市や奥州市との交流がある。中心になる都市は市を挙げての熱量がすごい。市内ではまだそれほどの熱量になっていないので中心拠点の団体と交流を持ち、熱量を感じてくれることが大事。
- 建設期は検査場。そこは検査する方がいる。地元業者が如何に関わってイけるか、地元業者が検査場に必要なもの（電気・水道・ガス）が必要になった際にすぐ対応できない可能性がある、何が必要か地元業者も含めて実際スタートするまでの準備を進めることが重要。
- そうなるがこの地方にも雇用創出の機会もあるのではないかと。運用期には内陸からではなく、民間企業・個人それぞれが得意分野を持ち寄り、イノベーションを行う研究会も必要。内陸では盛んに行われているので、企業同士の繋がりも必要。
- 検査場に研究者が入ってくると、1万人くらいの人口増が見込まれる。道路が良くなれば住居提供もできるようになるのではないかと。その際には地場材の活用もできる。特に当班では道路を中心としたインフラ整備、拡充をして総合的な組織の検討、ILCのことに大船渡で聞いたら、コーディネーターとなるようなそういう組織が必要なのではないかと。
- 大船渡市はやはり海。ILCから最も近い海が大船渡となる。海を物流、観光の拠点として整備していきたい。



## 観光・交流分野

- 観光・交流分野に関しては想定される効果が正直イメージしづらい所もあり、「建設段階では港湾を利用して資材が送られる」ということで関係者の宿泊、工事業者の観光、買物などの各事業者の経済効果への期待が話し合われた。
- 研究者の週末レジャー需要などの話も出た。
- そういった効果をもたらすためにテーマとしては3つ。「受け入れ環境の向上」、「資源の活用」、「地域の底上げ」。
- 受容環境の向上に向けて、例えば国籍や宗教などの違い、ヴィーガン・ハラールなどの対応、足洗い場といった施設的な対応、多言語対応を図る必要、文化を知ること課題がある。
- 場合によっては研究者・家族の通勤圏になりうるので、海を生かすことが大事。外国の皆さんはシーフードも好きなので、お刺身以外の食べ方や相性のよいワインなど複合的な価値創造ということも考えられる。
- W杯でも「直近のビーチはどこか」という問い合わせもあった。宿泊が少ない。民泊は受けるのではないかと。三陸鉄道も欠かせない資源。車内放送も含めてふだんできないコンテンツ、あるいは大船渡温泉も外国の方にとっては価値ある資源。
- 底上げという点では市民の皆さんも受け入れに向けた勉強を進めたり、プロモーションを動画などで切り開いていくことも大事なのではないかと。





## 生活・居住・滞在分野

・準備期間も含めてトータルで話をした。出てくるものは大船渡のもの中心になった。

・ILCができて研究機関の方が来る場合、英語が必要。英語教育は重点を置くべきということで、市、小中学生に英語の授業を重点的に行い「誰もが英語が話せる文化」がある町ができるよという意見が出た。

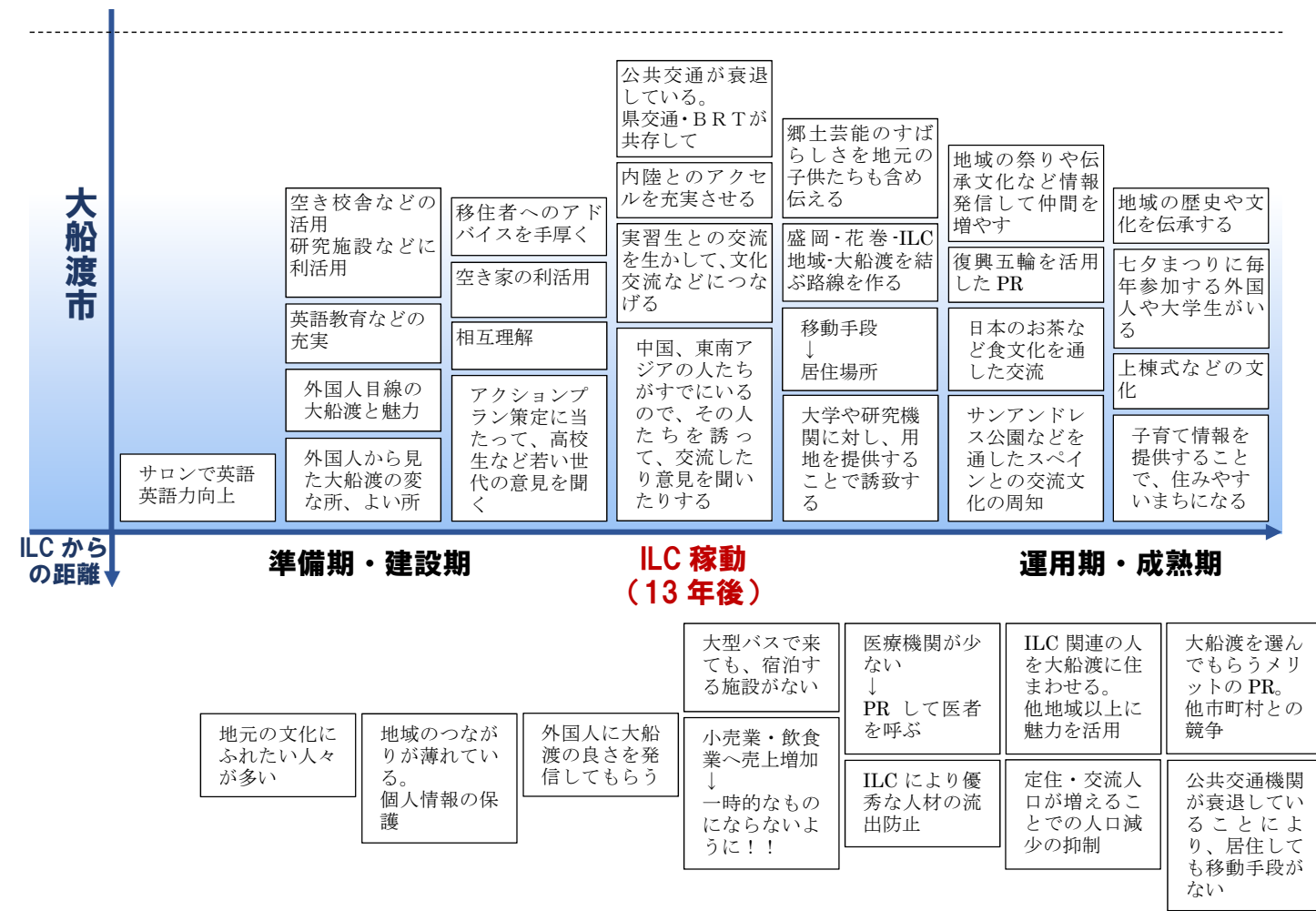
・高校生や若い世代の意見、どうしても20~30年先の大船渡の話なので高校生にも参画してもらうことで、もしかしたら驚くような意見も出るかもしれない。

・現在も外国人の方が大船渡に多くいらしている。そういう方が大船渡の良さ、悪さに色々な意見を持っている。そういった意見を聞くことで、そういった方々を迎える対応が取れるのではないかな。

・今までの歴史や伝統、文化などを知る機会が無くなってきている。上棟式の餅まきなどが簡素化されて無くなってきている。知らないでやらないのはよいとしても、20年後になると上棟式すらわからない人が大半になってくる。昔からの伝統を伝承する必要がある。

・外国人の研究者・家族にレジャーだけでなく、住んでもらうということも考えて、奥州市や北上市よりも踏み込んだ新しい発想、空き家、道路、医療施設をリニューアルして、まちのみんなが英語をしゃべることができる、そうしたことが居心地の良さに繋がり、それで「選んで」もらえる。

・海のおよさや文化を知ってもらう。



## 医療・教育・社会分野

・今、外国人の方が今大船渡でどういう状態にあるかという話で「WIFI環境が乏しいので母国との連絡が難しい」とのことだった。体験したことや地域の人から受けたことをすぐに発信する文化ができあがっていることでWIFI環境を整えることが大事だということが挙がった。

・国際交流は子供にとっては大人ほど外国人に抵抗がない。教育課程でも変化が出ている中、ALTも入って接する機会もある。そういったことでは抵抗感は少ないが、大人世代の方が抵抗があって話しかけられなかったりという状態もあると思う。そこに大船渡の方が積極的に関わっていく場面作りが必要ではないか、地域の公民館活動にも外国人を呼び込めるような環境づくりで大船渡をよい町だと捉えてもらえるようになるよ。

・教育ではカリキュラムがきついで地域や学童などにもILC関係者を呼んで講師をやってもらったり、東南アジア研修生を呼んで料理教室をやったり、交流を作ってはどうかという話があった。

・食では保育園で人工衛星にちなんだ「はやぶさランチ」というのをやっているの、同様に「ILCランチ」のようなメニューがあったら、意識も高まるのではないかなということだった。

・科学技術の分野の活性が高まることで、直接的に説明されても理解しきれないので、年代に合った説明の仕方でも伝え、科学の興味を喚起する機会もできるのではないかな。

・「見学して体験すること」が重要。来てもらって話を聞くだけでなく、実際見に行く活動ができれば。小中学生だけでなく、一般市民もバスツアーを実施すれば、我々も理解を深めて交流ができるのではないかなと思った。

・外国人受入には「自分の地域を知らなければ日本のよさを伝えられない」。教育場面では伝統芸能、郷土芸能など、地域の良さを学ぶ機会をもって、対等に付き合える力を付けたい。

・学校教育のカリキュラムはいっぱいになっている。小学生も6時間授業になっている。市の方針として「ILC教育をするのだ」というような位置づけがあれば取り組みやすい。

